２０２１年5月１９日（水）

老球の細道６１０号

県高校体育大会会津地区大会観戦記

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

「目に青葉　山ほととぎす　初鰹」。江戸時代の俳人山口素堂の有名な句である。春から夏にかけ、江戸の人々が最も好んだものを俳句に詠んでいる。この句が一躍有名となり、江戸っ子の間では、初夏に出回る「初鰹」を食べるのが粋の証となったという。

コロナが益々悪化する会津地区では今年も高体連は中止かと思われたが、高体連関係者や審判員の御尽力によって開催することができた。高体連地区大会もバスケットボール協会にとってはまさに今年度旬の大会である。どこのチームにどんな新入生が入部し、どれくらいチームに機能しているのか、転勤等でチームが変更になった指導者が新しいチームをどのように育てているのか非常に興味のあるところであった。

学校統合や部員減少で今までになく少ないチームでの大会で、そこに無観客が重なり、高校生最高の大会（インターハイ）というイメージはなくなり、寂しい３日間だった。

そんな中で決勝戦は男女とも会津高校と若松商業の決勝戦となった。両方のゲームを観戦して最も印象に残ったのは、三密を自粛する状況の中で、コンタクトの多い激しいゲームとなったことである。レフリーの判定も非常に難しい場面がたくさんあったが観戦していては非常に面白いところであった。トップレベルのバスケットにおいて、激しいコンタクトなしで戦えないのは今や常識である。

しかし、ただがむしゃらにコンタクトを求めてプレイするのでは賢いバスケットボールはできない。一歩間違えばファールトラブルやケガにつながってしまう。賢いコンタクトを練習すべきである。次の内容は閉会式の講評でも話したことである。

コンタクトには状況と場所によって３原則があると思う。一つは「状況による 3 原則」。①コンタクトを突破する②コンタクトを避ける③コンタクトを利用する。もう一つはオフェンスのドライブ時に起こる「コンタクト場所の３原則」である。①デイフェンスの身体の前にコンタクト→突破②デイフェンスの身体の正面にコンタクト→ステップバック③デイフェンスの身体の後ろにコンタクト→スピンムーブ。近未来バスケットボールでは、あらゆる場面で状況判断が求められ、日頃の練習においても状況判断を必要とするドリルが求められている。コンタクトプレイも例外ではない。

先日東京五輪代表を先行する NHK 杯体操大会が開催された。総合で２位になった「失敗しない男」の異名を持つ萱選手が「ミスをした箇所は伸びしろととらえ、同じ失敗を繰り返さないよう練習する」とインタビューで応えていた。

県大会出場を果たしたチームは県大会に向けてチームの伸びしろを伸ばし続けてほしい。惜しくも県大会を逃したチームも今大会の敗戦を伸びしろととらえ、次なる大会に向けてすぐに準備をスタートしてほしい。この大会で３年生は引退するような話があちこちで聞こえるが、インターハイは引退ハイではない。もっとバスケットを楽しんでほしい。